

日本ジオパークの再認定審査結果

日本ジオパーク委員会

本日の日本ジオパーク委員会で、下記10地域（現地審査10～11月）の再認定の可否について審議され、以下の結果となった。

再認定：洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク、糸魚川ユネスコ世界ジオパーク、隠岐ユネスコ世界ジオパーク、南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク、白滝ジオパーク、伊豆大島ジオパーク、銚子ジオパーク、ゆざわジオパーク

条件付再認定：島原半島ユネスコ世界ジオパーク、八峰白神ジオパーク

*再認定審査は通常4年に1度行われるものであるが、白滝ジオパークと伊豆大島ジオパークは2014年に条件付き再認定となっていたため、2年目の今年に再認定審査を行った。

1. 洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク

2012年の再審査後、事務局職員の継続的な配置、専門職員の雇用の計画がたてられ、解説板の設置、パンフレットやガイドブックの作成などに火山マイスターネットワークが深く関わるとともに、歴史・文化系サイトとの連携、拠点施設を有機的に活用した周知活動、教育への普及、ガイド団体との連携が強化された。また、地域住民のジオパーク活動を通じた防災意識の高揚が認められる。

以上のことから日本ジオパークとして再認定とする。

2. 糸魚川ユネスコ世界ジオパーク

フォッサマグナミュージアムの大改装の実施や、検討中のフォッサマグナパークの改善など、糸魚川ジオパークの重要な拠点を「変える」積み重ねは大きく評価できる。行政だけでなく地域の各種団体による戦略プロジェクトも一定の成果を上げている。一方で、ヒスイの保全問題については、具体的な進展が見られなかった。住民、行政、研究者などの関係者が、ともに考え続ける取り組みは不十分で、ジオパークとして求められるボトムアップの活動も他のジオパークに比べて足りない。

今後は、「セカンドステージ」と位置づけて、原点に戻って活動を行うとしており、今後の取り組みに期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

3. 島原半島ユネスコ世界ジオパーク

地域のジオサイトを活用した教育研究活動が盛んに行われており、その成果も地域へ還元されている。香港や濟州島とのジオパーク姉妹提携により積極的な国際交流が展開されている。また、サポーター制度も導入されている。

その一方で、地域全体での情報共有が不足しており、ジオパークを使ってこの地域をどうしていきたいのかが関係者の中で十分認識されていない。また、前回の再認定審査で指摘した事務局体制

の改革やガイド団体の組織化が不十分である。

以上のことから、日本ジオパークとして条件付き再認定とする。

4. 隠岐ユネスコ世界ジオパーク

隠岐地域全体の経営の中核にジオパークが位置づけられており、島への入口である「隠岐世界ジオパーク空港」やフェリーターミナルでジオパークの可視化が一層進んだ。また島根県等の支援もあり、ジオサイトへの説明板や誘導板の設置が計画的に行われている。さらに近年増加する外国人ビジターに対応するため、他のジオパークでは例が限られるフランス語対応などが進められ、ガイド組織の充実も図られている。今後、地質遺産の科学的価値の評価とそれに基づいた保全活動や、独自のジオツアー開発などを進め、日本・アジア地域を牽引していけるような隠岐モデルを構築することが期待されている。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

5. 南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク

前回審査時の指摘課題については概ね改善され、さらに成果を上げている。特に自治会を中心とした非常に熱心な取り組みがあり、地域活動をけん引するリーダーが生まれている。また小学生から高校生までの教育活動が実践され、それらを支える拠点文化施設を中心に地質学的側面からの非常に高度な解説がされている。しかしながら、本ジオパークが4市町村にまたがり、秋葉街道沿いに南北に長く位置することから、市町村毎にその取り組み方に異なる部分が見受けられる。このことを課題とし、現在、事業計画をベースに各専門部会の活動をジオパークエリア全体に広げようと組織や運営体制の強化が図られつつある。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

6. 白滝

前回の再審査において条件付き再認定となった後、推進協議会が活動の主体となるように運営組織の再編がおこなわれた。地域の代表者からなるワーキングチームを核として協議しながらマスタープランを完成させるなど、大きな課題とされた項目についての改善が認められた。また、ガイド団体や丸瀬布昆虫同好会などのさまざまな団体などとの連携によるジオパーク活動が推進され、小学校や高校との連携などによる教育分野でのジオパークの活用も活発に行われている。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

7. 伊豆大島ジオパーク

前回の再審査において条件付き再認定となった後、ジオパークの位置付けの明確化やジオパークを推進する町の認識の向上、ジオパーク推進組織の体制の見直しなど、多くの課題の改善が認められる。以前より活発に行われていた住民活動はレベルアップしており、それに新たな地域住民が加わりジオパーク活動の裾野が確実に広がりを見せている。気象庁や環境省、東京都などの支援機関との連携による保全活動や防災活動などが地域住民とともに積極的に行われている。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

8. 銚子ジオパーク

拠点施設の整備や千葉科学大学等との連携による活発な教育活動、銚子ジオパーク推進市民の会をはじめとする市民のかかわりなど、4年間での前進が認められる。大地と文化をつなぐジオストーリーの深化や観光導線づくり、地層の保全問題など、さらに取り組むべき課題もあるが、これらを実現できる体制があり、今後に期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。

9. 八峰白神ジオパーク

小さな町のスケールメリットを活かし、地域の様々な主体が互いに顔の見える連携を築きながら、ジオパーク活動を推進している。また教育面をはじめ、地域の価値を再認識するための活動が活発に展開されている。しかしながら、ジオサイトの価値評価やその保全方法においては科学的な裏付けが不足し、ジオストーリーの明確化、ジオサイトへの案内看板やわかりやすい解説板の設置、ガイドスキルの向上など、十分な進展が見られなかった。

以上のことから、日本ジオパークとして条件付き再認定とする。

10. ゆざわジオパーク

前回審査時に出された課題について、着実に取り組み、改善が図られてきている。特に、子供を含めた市民の積極的なジオパーク活動への参加があり、ボトムアップ型のジオパーク活動が着実に進展している。教育活動については、地域学習を全域的に行い、その情報の共有も進められるなど、他のジオパークの手本となる優れた活動であるといえる。今後は、東北地域に限らず、日本ジオパークネットワーク全体の活動を牽引する存在になることが期待される。ジオサイトの整理など、今後取り組むべき課題がいくつかあるものの、全体としては質の高い活動が行われている。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定とする。